
リン！ リン！ リン！

夢小路 一瞬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リン！ リン！ リン！

【Nコード】

N5273I

【作者名】

夢小路 一瞬

【あらすじ】

ドリカムの曲の通り、かも（汗）

ring! ring! ring!
Dreams Come True

日曜の午後、どこにも出かける予定のなかったあたしは、気持ちよく昼寝をしていた。それを、ヤツからのベルが中断したのだ。

ついこの間、新しい端末に替えて、和音で着信音が鳴るようにしておいたから良いようなものの……。

「もしもし」

あからさまにいやそうに一言目を発すると、受話器の向こうからヤツの声が遠慮がちに聞こえてきた。

「ご、ごめん。もしかして、寝てた？」

慌ててあたしは声を半オクターブ上げ、ことさらに寝起きではないことを強調した。

「う、ううん、そんなことないよ、起きてたよ？ 何、どうかした？」

ヤツの声はいつものように優しくかった。

「うん、ちよつと、今近くまで来てるから、時間あいてたら会えないかなって思って」

（えっ?!）

ヤツの言葉の意味が一瞬分からなかったあたしは、黙ってしまった。それを、ヤツは拒絶と勘違いしたのだろう、続けてこう言った。

「良いよ、忙しいよね、ごめん。じゃあ……」

あたしは慌ててこう叫んだ。

「いい、忙しくなんかないわ……ちよつとくらいなら、時間とつてあげても良いわよ、べつに……」

（あっ……）

「そう、じゃあ、待ってるよ、俺」

「でも……」

「でも？」

「今から支度するんだし、1時間くらいはかかるかも知れないわよ？」

ヤツが優しく言ってくれているのは分かっている。こんな口の利き方が可愛くないことも。でも、どうしてもこうなってしまふのだ。あたしが、ヤツのことを好きになりかけていることを悟られるのがいやだから……

「全然オツケーだよ、俺は時間に余裕があるから」

「じゃあ、待っててね。早くいけたら早く行くわ」

「わかった」

ヤツのその一言を聞き終えるなり、あたしは電話を切って、ダッシュで身支度を始めた。毎朝、コレくらいのスピードで支度ができたら、もっと早くに家を出ることができ、駅から会社までランニングすることもないのに、となぜか思いながら。

あつという間に服を選んで、着替え、メイクをし、そして髪型を整える。

「出かけてくるからねえっ！」

自分の声を後ろに残すように、玄関のドアを開けると、あたしはパールピンクの自転車の飛び乗った。

自転車に乗ったあたしは、必死でペダルをこいだ。

（あたし、ヤツからの電話で浮かれてる？ まさか……ヤツがどんな男か見てみたいだけ。ただの好奇心よ、好奇心……）

（でも、それならどうしてこんなに必死で走ってるの？ ヤツに会いたいからじゃなくって？ あいつのことが……）

ちょうど向かい風でスカートの裾がめくれあがってしまったが、そんなことは気にしていられない。そのままにして走っていたら、向こうから来たおじさん達の目がまん丸になっていた。たまには目の保養もしなきゃあね、なんて、いらぬサービスかも。

さつきから同じことが 頭の中をぐるぐる回っている。おかげで

危ない目に何度遭ったことが……

一方通行の路地から出てきた車にぶつかりそうになり、ドライバーがなにやら大声で怒っていたようだったが、とにかく頭だけ下げ、急いでその場をあとにした。

考えごとをしてたら、今度は信号が赤だった。慌ててブレーキをかけたけれども、もう少しで二度とヤツの声が聞けなくなるところだった。

いつもはする事なんてない、立ち漕ぎまでして、あたしは待ち合わせ場所へ急いだ。

やっとの事で、待ち合わせ場所の近くまで来た。あそこに見える角を曲がればヤツとの待ち合わせ場所だ。

あたしは自転車を止めて、大きく3回、深呼吸をした。

吸って、吐いて。吸って、吐いて。吸って、吐いて。

息を整えると、あたしは小声でこう言ってみた。

「早かったでしょ？」

よし、大丈夫。息も整ったし、声も震えていない。チェックを終えたあたしは、意気揚々とヤツの待つ場所へ歩いていった。

「意外と早かったでしょ？」

ヤツはあたしを見つけて大きく右手を振ってくれた。あたしの問いに、ヤツは微笑って頷いた。

「待たせちゃ悪いと思って、早く来てあげたよ」

（あ……）

また、この口調になってしまった……だがヤツは、微笑みを絶やさずにこう答えてくれたのだ。

「ありがとう、来てくれて」

「う、うん……」

それからあたしはヤツと二人でその辺の店を何軒か回った。

そのあと、コーヒーを飲もうということになって、喫茶店に入っ

た。

ずっとヤツの顔から笑みが絶えなかったので、あたしは思いきって理由を尋ねてみた。

「今日はずいぶん優しい目だね。いつもより一杯笑ってるよ？」

ヤツは静かにこう言った。

「そのことカア。気になるんだったら、鏡を見ておいでよ」

（なにそれ?!）

あたしは慌ててポーチをひつつかむと、洗面所に駆け込んだ。洗面所の大きな鏡に映ったあたしは、髪がぼさぼさで、おでこが丸出しになっていて、どう見ても全力疾走して来たのがばれの顔だった。

せつかくだから、メイクをやり直して席に戻ってあたしはこう言った。

「もう……しってたんだったらおしえてくれたらいいのに」

ヤツの目からはそれでも微笑みが消えない。

「だって……嬉しかったんだもん……」

その店を出てからは、急に肩の力が抜けたように、あたしはおしやべりになった。

「ねえ、あたしの乗ってきた自転車見せたげる、おいで」

ヤツはあたしを後ろに乗せ、ぐんぐんとペダルを漕いで、走り出した。

坂道もものともせず、あたしを連れて見晴らしのいい公園に連れて行ってくれた。

そこで初めて、ヤツが小さい頃にこの辺に住んでいたことを知った。

ヤツがあたしの顔を見てこう言った。

「ガキの頃から、俺、好きな人を連れてココに来る、って決めてたんだ」

「えっ……好きな、人、と……?」

あたしがその言葉を聞いて、戸惑った次の瞬間に、ヤツの唇があたしの唇に重なった。

（そっか……そうだったんだ……）

あたしの中に、ヤツの優しさがいっぱい送り込まれてくるような、そんな不思議な、初めてのキスだった。

…… F i n ……

（後書き）

あなたが小説にして欲しいと思う歌はなんでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5273i/>

リン！リン！リン！

2010年10月22日00時20分発行